

里川と人々の関わり

—琵琶湖周辺地域の暮らしから考える—

龍谷大学政策学部清水ゼミナール3回生

糸川風馬・河崎佑美・西川大夢・井上裕美・坂本風輝・谷口弘明・出口真生樹・

西村大輝・長谷井典・半林奈津子・彭開源・俣野有紀

龍谷大学政策学部・准教授/里山学研究センター・研究員

清水万由子

1 はじめに

近代化が進み、私たちは蛇口をひねれば水を使うことができる。多少汚れたものを流しても、下水道が完備されているためそのまま流れることもない。他にも、治水・利水を目的とした行政による河川管理や整備が行われるなど、私たちは安心・安全で便利な生活を送ることができるようになった。

その一方、毎日の生活を送る中で“自然との関わり”が希薄化していることに気づいているだろうか？自然との関係だけでなく、“人と人のつながり”までも失いかけていることを知っているだろうか？自然と関わることの必要性を見出せなくなっている人も少なくないのだ。

私たちは自然との関わりが希薄化した現代において、環境社会学の“生活環境主義”や“里川”という概念を基に人と自然が関わることの意味を明らかにしたい。その答えを導き出すために、最も身近な自然である水に着目し、琵琶湖周辺地域における人と自然の関わりがどのように変化してきたのかを調査する。

2 里川概念

2-1 環境社会学とは

環境社会学は、フィールドワークを通して生活者の視点から人と自然の関わりを明らかにする学問だ。そして、私たちの社会で展開される様々な自然環境の利用や保全に関わる事柄を具体的に分析し、人間にとっての自然の価値や両者の関係性の在り方を考えていく際に有効なアプローチとなる。地域が抱える課題への解決策を見出すためにも、自ら現場に向き、そこで暮らす人々の声に耳を傾けることが求められる。

2-2 生活環境主義

1970年代に琵琶湖における環境問題へのアプローチには、有力な2つの主義が存在した。これまでの生態系や自然を人の手を加えずに守る“自然環境主義”と、科学技術の進

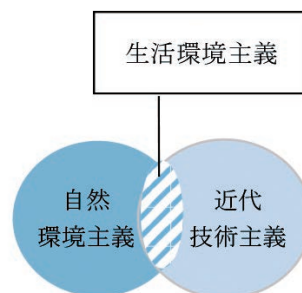


図1 生活環境主義について
(荒川・五十川、2008)を基に筆者作成

歩により問題解決をしていこうとする“近代技術主義”だ。この2つは、現場で生活する人々の暮らしをあまり優先することなく物事を進める傾向にあった。そこで、“生活環境主義”の立場が登場した。

生活環境主義は、生活をする人々の価値観や知識（＝生活知・実践知）、社会的関係を重視した生活者の立場から環境との関わりを探究する考え方だ（嘉田，2008）。その地域に暮らす人々の“生活”に着目し、いかに自然を利用し保全しているのかを記述することを重視する。この際の基本的な視点の1つが“経験論”である。ここでいう経験は、ある人や集団にとっての、過去の記憶されている時間の蓄積のことである。行為だけを切り取って分析するのではなく、暮らしの歴史や時間軸からみた経験を分析することが、生活環境主義の重要な要素なのだ（荒川・五十川，2008；鳥越，1984）。

2-3 里川

2-3-1 里川概念

里川とは、「地域の人々の生活と密接な関係性を持つ、最も身近な川」とされている（鳥越・帯谷，2009）。目の前を流れる川は、その地域に暮らす“みんなのもの”であるという考え方によって、人々は身近な川を生活の中で管理・利用してきた。その中で、実用的価値・経済的価値・精神的価値・社会的価値・観念的価値などといった多面的な価値を見出してきたとされている。具体例としては次のとおりだ。

- * 実用的価値…生活用水、水運、農業用水。
- * 経済的価値…数字で表すことができる。漁撈^{ぎょうろう}。
- * 精神的価値…楽しみ、感謝、誇り、癒し、思い出。
- * 社会的価値…つながり、信頼、規範、遊び場、防災。
- * 観念的価値…信仰の対象。



図2 里川の生み出す多様な価値
（鳥越・帯谷，2009）を基に筆者作成

里川は、人々が毎日の生活の中で水を利用する“資源”としての価値に限らず、他にも多様な価値を生み出すものであったのだ。

2-3-2 里川概念が生み出された背景

かつて人々は、身近な川の水を飲用や洗濯、農作物などの洗い物などに使っていた。また、物資や人々の移動つまり水運としても川に依存していた。他にも、農地に引き込み農業用水や生業としての漁撈、火災時の防火用水をもたらす防災、そして子どもたちの遊び場として使っていた。このように人々は、毎日の生活の中で様々な用途のために川を利用してきたのだ。1本の川を地域に暮らすみんなで利用するからこそ、集落で定められた“ルール”や常識としての“わきまえ”が生み出されてきた。そして、そのルールやわきまえの基、地域の人々が共同で維持管理するため、次第に“信頼”や“人と人のつながり”も生まれてきた（鳥越・帯谷，2009）。

また、人々は、生活から出た残りの水（台所や風呂水などの家庭からの排水や人間のし尿）は、肥料として畑にまいて再利用するなど、排水といわれるような不要な水は一滴もなかった。水は、限りある資源として、“もったいない”という意識のもと、ていねいに使い回して利用

されてきたのだ。この背景には、川には神様がいるというように、川を信仰の対象とし、汚水を流すことが戒められてきたことなどがあった。昔の人々は、目の前にある川と密接に関わる中で、多様な価値や地域独自の知識・工夫を自然と生み出す、“近い水¹”としての水利用が当たり前であったといえる（嘉田，2003；小坂，2010；鳥越，2006）。

ところが近年、みんなのものであった川は、公（国や地方政府）のものとなり、治水や利水を目的とした水路の埋め立てや道路の拡幅が行われ、水道や上下水道なども整備された。便利な世の中になった反面、人々と川の関わりは希薄化し、人と人の関係性や地域コミュニティも崩壊されてしまった。身近な川と関わる中で、多様な価値やルールなどの相互規制を生み出してきた近い水としての水利用が失われていった。だからこそ、かつての川と共に生きた暮らしの在り方を里川概念として定義づけ、見直していくことが求められたのだ。

私たちは、日本の水政策が移り変わっていくきっかけとなった舞台といわれる琵琶湖周辺地域に着目することで、里川概念は、今を生きる私たちにとってどのような意味があるのかを考えていきたい。そして、環境社会学において重要な課題となっている、自然の多様な価値はどのように生まれてくるのかという“顕在化の過程”をより具体的に明らかにしていく。

3 里川概念から見る琵琶湖周辺における人と水の関わり

3-1 琵琶湖周辺における人と水の関わりの概要

3-1-1 水害の被害を最小限にするための改修工事

かつて琵琶湖周辺のほとんどの地域で、湖水や川水、湧水、井戸水などが飲料水として利用されていた。その一方で、河川は洪水の危険性を抱え込むといった負の側面を持っていた。滋賀県全体で頻発した水害に対処するための治水政策の一例として、1971（昭和46）年に着手された守山市の野洲川改修工事が挙げられる。この改修工事は、川底が周辺の地面の高さよりも高い位置にある天井川の解消を目的とし、水害の被害を防ぐためのものであった。しかしその影響で、以前の湧水（伏流水）を利用していた生活が失われ、次第に人々の川や水に対する関心を希薄化させ、“遠い水²”にしてしまった。

3-1-2 開発による人々の川離れの拡大

そして、遠い水をさらに拡大させてしまったのが1972（昭和47）年の琵琶湖総合開発³計画特別措置法の成立である。日本は高度経済成長期に入ると、阪神地域において人口の集中と産

年代	1900年	1911年	1925年	1945年		1955(昭和30)年	1970年	1975(昭和50)年	1989年
	明治	大正	昭和戦前期	昭和戦後期					平成
社会状況						高度経済成長期			
水環境問題	洪水被害								
	食糧増産・干拓					都市型洪水			
	都市化・埋め立て								
水政策	治水政策			多目的ダム計画					
				琵琶湖総合開発(1972)					
	利水政策			守山市野洲川改修工事(1971～)					
	下水道法制定(1900)			水資源開発(1961～)			用水供給事業(1975～)		
水との関わり	近い水					遠い水			
						滋賀県営水道導入			
下水道法改正(1958)									

表1 滋賀県における水政策の変換（嘉田，2003を基に著者作成）

業の急伸が発生し、下流の水需要が急増したため琵琶湖の水資源開発が求められた。それは、琵琶湖周辺地域の保全や開発を目指すということが狙いであった（嘉田，2003；高崎，2013）。1975（昭和50）年代以降、琵琶湖総合開発の用水供給事業により、水道が導入されるようになった。いつでも自由なだけ用水を取り入れ、排水を出すことができる用排水分離方式により水田の排水も大きく増えた。また急速な人口の増加や生活様式の変化が原因となり、家庭排水が増え水質汚染問題が課題となった。それによって1900年に制定された下水道法が改正された。

このように、開発が進むにつれて、地域住民の水との関係が希薄化し川離れに拍車をかけてしまった。近い水を利用してきた人々にとって川や水は遠い水となってしまったのだ。

3-1-3 里川概念が継承される地域

琵琶湖周辺には、上下水道整備や開発が進んだ中でも以前のような人と水の関わりが継承され、維持されている地域もあれば、失われてしまった部分はあるものの、まだ昔のような水との関わりが残っている地域もある。そこで私たちは、このような里川概念が失われかけつつも残っている“伊庭集落”と、今なお受け継がれ続けている“針江集落”の2つの地域に着目した。

3-2 人と水の関わりが失われかけた伊庭集落

調査概要

- ・ 1回目：2016年7月20日 2回目：2016年10月19日
- ・ 滋賀県東近江市伊庭集落
- ・ 伊庭庄の歴史を語る会M氏、正厳寺住職
- ・ 内容：伊庭の歴史と水辺の暮らし

3-2-1 伊庭集落の基本情報

(a) 位置情報

伊庭集落は滋賀県東近江市伊庭町であり、東近江市の能登川地域に含まれる。伊庭町は、湖東平野に残る水郷集落の一つで伊庭内湖と接した集落である。（図3）

伊庭町の面積としては、約2, 232, 190m²である。

(b) 人口

表2 調査地域の人口（滋賀県HPを基に筆者作成）

	人口(人)	世帯数(世帯)
滋賀県	1,414,510	560,242
東近江市	115,210	42,892
伊庭町	1,983	653



図3 伊庭集落の位置（★）
（滋賀県地図マピオンより引用・筆者作成）

(c) 産業、生業

伊庭を含む能登川流域では、江戸時代から麻織物の製造が盛んで、内湖⁴の湿気を含んだ気

候が麻織物に適していた。湖上交通の要衝であったため商店も多く、全戸数のおよそ3分の1が商業を営んでいたという。

また、琵琶湖と水路でつながり、生き物の産卵や育成の場となっていた内湖には多くの魚が生息した。内湖での漁業の多くは農業を営みながらのものであり、おかず獲り⁵程度のものだった。(能登川の歴史編集委員会, 2012; 2015)。

3-2-2 伊庭集落における人と水の関わり

かつて能登川の西部には、大^{だい}中^{なか}の湖や小^こ中^{しょう}の湖と呼ばれる内湖が広がっていた。その内湖畔の集落(伊庭を含む)の景観を特徴づけていたものは、ホリやカワと呼ばれる水路であり、それらは集落から内湖を介し琵琶湖へとつながっており、舟の通路として利用されていた。また、ホリやカワの水は日々の洗い物や飲料水にも使われ、人々の暮らしには欠かせない存在であった。伊庭の坂下し祭りも、現在では^{きぬがさやま}織山から神輿を引きずり下して巡幸させるものであるが、かつては神輿を舟に乗せて集落内の水路や内湖を巡っていた。山から下りてきた神様が、里と内湖を祝福して回ったのだ。

しかし、時代の変化により徐々に水路が汚れていき、次第に井戸(地下水)を掘るようになり、水路の水は雑用水として利用されるようになった。そして、上下水道の普及により水路の水は使われなくなっていった。また現在では、車社会の発達により、交通手段が舟から自動車へと変わる過程において、カワトを含めた水路が埋め立てられ、道路に変わっている。昔は人一人が通る幅しかなかった道路が、今では車がすれ違えることができる程にまでに拡張されている。

(a) 伊庭集落を駆け巡る水路のかつての利用

伊庭内湖に接する伊庭集落では、水路が集落内を縦横に巡り、内湖での漁撈や水田への往復に舟を日常的に利用していた時代があった。各家は道には面していなくとも水路には必ず面していたこともあり、水路で水仕事などをするために設けられた“カワト”が各家に多く残されている。カワトとは、水路へと降りるための石段で、以前は一戸に一つはあったといわれている。伊庭の住民はそのカワトを使って水路の水を汲み、生活用水として利用していた。例えば、米とぎ、飲料水、洗濯、お風呂の水などの利用法がある。また、集落から内湖に行くために、“田舟”という舟を使い、水路は水運として道路の代わりを果たしていた。その田舟の舟着場としてもカワトを利用していた。

田舟は人々にとっての移動手段として、内湖での漁撈や水田との往復のために毎日の生活の中で使われ、嫁入りの時も舟に乗って来たといわれている。

水路の利用は、生活用水や水運だけでなく、子どもたちがタライ舟に乗って、遊ぶための遊び場としての利用もあった。そういったこともあり、水路が汚れていたらみんなで



図4 カワト
(2016年10月19日筆者撮影)



図5 使われなくなった田舟
(2016年7月20日筆者撮影)

掃除を行っていた。

「以前は、カワトのない家はないと言えるほどで、水路は自分の家のものでもなく、向かいの家のものでなかった。」

というMさんの言葉からも、住民がみんなで水路を利用していたことがわかった。また、水路は誰の所有物でもなく、集落の総有に近い感覚であったことが推察される。水路は各家から内湖までつながっており、住民は他人が使うことを意識しお互いに配慮があったことがわかる。

このように伊庭集落を縦横に巡る水路は、人々の生活に“実用的価値”をもたらし、人と水の関わりをとおして住民同士の関係をつなぐ“社会的価値”を生み出す役割を担っていた。

(b) 時代の変化により失われていった水との関わり

時代の変化によって、伊庭集落での水利用が希薄化した背景には、大きく2つのことが挙げられる。

1つ目は、内湖を干拓して農地を造成したことで水路が途絶え、田舟で移動できる範囲が狭くなったことにある。

琵琶湖の内湖や湿地の多くは、戦後の食糧不足と人口増加に対応するために干拓⁶された。しかし、大中の湖と小中の湖の干拓が完成した時には米が余る時代に突入し、干拓された農地でも使われない農地が存在した。

この内湖の干拓により、内湖での漁業・漁撈や内湖を横切るような移動ができなくなり、水路が水運機能を果たさなくなった。昭和30年代まで使われていた田舟も、農作業の機械化により、農作業道具を運ぶためには使われなくなった。そして、移動手段を自動車に転換する過程において、水路は埋め立てられ道路となった。

2つ目は、近代化が進み暮らしが便利になったことにより、水路の水利用への執着心がなくなったことである。時代の変化によって生活様式が変わり、水路の水が徐々に汚れていった。人々は井戸（地下水）を掘るようになり、かつて生活用水として使われていた水路の水は、汚れたものを洗うだけの雑用水として利用されるようになった。さらに、上下水道の普及により安心して安全な水が手に入るようになり、水路の水は使われなくなった。

このように、伊庭集落では昭和30年代以降に生業・生活のあり方の変化に伴って水路への物理的な関わりと精神的な関わりがともに希薄になり、水路が持っていた多面的な価値が失われたことがわかる。

(c) 現代にも残る水・水路利用

伊庭は内湖の干拓や水路の埋め立てによって、昔の生活や風景は失われたかのように思われたが、現在まで残っているものもあった。

水路の中には生簀があり、そこで鯉を飼っている。昔は木で囲いその中で飼っていたが、木は腐りやすいため現在はパイプで囲って作られている。

「今日のご馳走がないなあってなった時に、一匹上げてきてボンと殺したら、煮付けにも刺身にも、アラ（骨）で味噌汁にもなる。鯉一匹つぶしたら大変なご馳走ができる。みなさんは、冷蔵庫にハムやらソーセージやら入れはるやろ？それみたいなもんや。」

とMさんは話した。生簀に食べた後の鍋をつけておくと、鯉がきれいにしてくれたそう。

また、生活における水や水路の利用と同じように人々の水への信仰心もあり、「汚いものは

絶対に故意に川には流さない、川には神様がいます。」とあって、水神を祀る家もあった。その名残もあり、現在でも伊庭集落では、毎月1日と15日ではカワトにお供え物をしているようだ。このような水に対する信仰心は、“観念的価値”として捉えることができ、今の生活においても大切に守られている。

他にも、水路とのかかわりを示すものとして、舟板の再利用が挙げられる。伊庭集落を歩いていると、舟の形をした塀を見かけることができる。これは昔使っていた田舟の板を倉の塀として再利用しているものだ。ここからも伊庭集落では、昔から人と水が密接に関わっていたということを垣間見ることができる。

(d) 水辺景観の保全と継承

このように伊庭集落にはカワトをはじめ、水と人々の営みによって生み出された貴重な風景や知恵が残っている。そこで、平成21年に滋賀県の教育委員会文化財保護課が“近江水の宝⁷⁾”として、伊庭の水郷と伊庭内湖を20番目に認定した。

それ以来、東近江市はこの風景を市民共有の財産として次の世代へ引き継いでいくとともに、景観を活かしたまちづくりを推進するため、平成26年8月1日から伊庭集落を“湖^{みずべ}辺の郷伊庭景観形成重点地区”に指定した。これにより、景観法⁸⁾に基づく一定規模の建築・開発などを行う際の景観に関する基準を定めるようになった。その効果もあり、昔の人と水の関わりはほとんど残っていないものの、景観という形で現在に残されている。そして、昨年^{2015年}の4月に伊庭の水辺景観は滋賀県の日本遺産⁹⁾“琵琶湖とその水辺景観－祈りと暮らしの水遺産”に認定され、水辺景観の保全・継承に対して再び関心が高まりつつある。

3-3 人と水の関わりが受け継がれている針江集落

調査概要

- 第1回：2016年6月26日、第2回：2016年9月9日
- 滋賀県高島市針江集落
- 針江生水の郷委員会、地域住民の方々（Fさん男性・女性、Mさん、Yさん）
- 内容：針江のカバタと町並み、琵琶湖畔

3-3-1 針江集落の基本情報

(a) 位置情報

針江集落は、湖西地域で最大の安曇川^{あどがわ}下流の扇状地の左岸に位置している。周辺は南北に連なる比良山系に続く開けた自然豊かな里山だ。安曇川の伏流水が湧水となり、また山間深く流れ出る水が田畑を潤し、各河川に集められた水は農地を巡り琵琶湖へと流れ込んでいく。集落面積は田畑、居住区を含め約130haで、集落の中央には針江大川が流れている。

(b) 人口

表3 調査地域の人口（滋賀県高島市HPを基に筆者作成）

	人口(人)	世帯数(世帯)
滋賀県	1,414,510	560,242
高島市	52,486	18,132
新旭町	11,122	43,21
針江集落	721	227

(c) 産業、生業

高島ちぢみといった縮織¹⁰が有名で、安曇川の湧水の美しさと、場所によっては水が金気を含んでいるため、紺染めに都合がよく美しい糸に仕上がる。昭和30年から50年代に農業と漁業を生業にしながら副業として織物や撚糸¹¹も盛んに行われていた。しかし、原料需要が国内から国外へ移ると大規模化が求められ、家内工業が大型工場へと変わっていき、廃業する人が続いた。現在は、大型工場以外に家内労働的なところも少し残っているようだが、昭和40年代後半まで続いた高島ちぢみの全盛期は終わりを告げた。

現在の針江集落では、世帯数の半分ほどがサラリーマンへと変わったものの、自分たちが食べる分だけは土日を利用して農漁業が行われている。9名の農家による針江有機米栽培グループは、針江大川の川掃除で出た藻や米ぬか、レンゲを緑肥¹²に使うという昔ながらの環境への負担を最小限に抑えた農業を行い、“針江げんき米”というブランド有機米として生協などに販売している。針江地区で取り組まれているみずすまし水田プロジェクトは、休耕田に水路を作り湿地化させ、絶滅危惧種のスジシマドジョウが発見されるなど、人と生き物が共生できる農業を大切にされている。

3-3-2 針江集落における人と水の関わり

針江集落をはじめとする湖西における多くの地域は、自然の水（湖水、川水、山水、湧水など）を飲料水や生活用水として利用していた。針江地域では、地域一帯から湧き出る豊かな水を生活用水や農業用水として利用しており、水は貴重な生活資源として人々に恵みを与え続けている。

このように針江集落の人々は、水と共に関わり合って生きてきた。そのような集落で共有されていた暮らしの営みの風景は、カバタが象徴する針江の水文化をあらわすものである（小坂、2010）。

(a) 生活に埋め込まれたカバタの価値

・カバタ文化

針江集落では、四季を通じて変わらない水量・水温（13℃前後）の軟水である“生水”^{しょうず}と呼ばれる湧水がある。生水を飲料水や生活水として利用するために使われている特徴的な洗い場のことを“カバタ”^{つばいけ}という。生水が壺池に溜め



図6 針江集落の位置（★）
（滋賀県地図マピオンより引用・筆者作成）



図7 カバタ
（2016年6月26日筆者撮影）

られ、その水は洗面器などにとって顔洗いや飲み水に利用される。壺池では、下洗いした野菜や果物を浸けたり食器を洗ったりし、壺池からあふれた水は端池に落ちる。端池には鯉やフナなどを飼っており、魚たちがごはん粒や食べ残しなどをきれいに食べてくれる。魚たちは水を浄化してくれるのだ。魚たちが浄化してくれたきれいな水は、川（水路）を通り隣のカバタへと流れていく仕組みになっている。

元池→壺池→端池→水路をくり返しながら集落を流れる針江大川、そして琵琶湖へと流れていく。

各家庭に、先代から大切に守り伝えられてきた自分専用のカバタがあり、その水は飲料水・洗顔・風呂水・野菜や飲み物を冷やすことなどに利用されている。水道導入後は、カバタの水（生水）と水道水を目的によって使い分ける家庭、地下水をポンプで汲み上げ家の中に取り込んで利用する家庭など、使い方は様々であるが今も毎日の生活の中で大切に使われている。

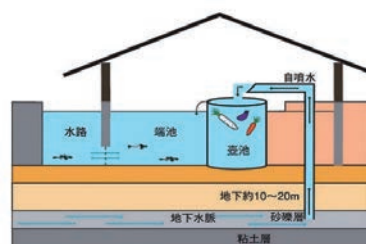


図8 カバタの仕組み
(針江パンフレットより引用)

・カバタの実用的価値

針江集落の人々は、水道が導入されても毎日の生活用水としてカバタの水を使い続けている。蛇口をひねれば水が出るけれど、それでもカバタまで降りていき、しゃがんで水を使う。

カバタを利用することが生活の一部として身体に染みついている。

「水道水に比べてカルキ臭くなくておいしいから。」「水道代もあまりかからないから。」

と言ったYさんとFさんの言葉から、カバタの水を利用し続けることに今も合理的な理由があると納得できる。しかし、実はそれだけではんく水質の良さや便利さ以外により本質的な何かがある（川田，2013）からこそ、針江の人々はカバタの水を今もなお利用し続けている。そのヒントはMさんにとってのカバタの存在・価値にあった。

「冷蔵庫で冷やしたものは冷えすぎてしまうが、カバタで冷やしたイチジクや桃などは、そのままの味が分かる。カバタの水温の14～15℃くらいで冷やしたほうが甘みも飛ばずにちょうどいい。」

「冬場は、湯沸かし器にしくなくてもカバタの水で冷たくないし、お茶碗とか洗うのに手も荒れない。水道水のお湯の方で洗えばいいけれど、お湯で洗うと手が荒れてしまうからカバタの水を使う。」

このように1年中変わらない水温の（夏は冷たく、冬は温かい）カバタをうまく使いこなす“知恵”や“工夫”がそこにあった。

・カバタの観念的価値と精神的価値

「カバタは、地形的にもつくろうと思ってつくれない…天の恵みなんです。そういう地域に住んでいるとね、ありがたいなっていう感謝の気持ちもあるし、そういう自然が残してくれた水文化ってのも守っていきたい。」

というFさんの言葉から、カバタは“水神様の宿る場所”としても大切に守られてきたことが分かる。1年の始まりは、カバタからいただく若水（わかみず）を神様にお供えしたり、カバタで汲んだ水を使ったお雑煮を食べるという習慣があるという。

このように、カバタは神聖な場所としても大切に守られ、信仰の対象としての“観念的価

値”や、水に感謝し大切に使うという“精神的価値”を生み出してきたのだ。その価値は、針江集落ならではの水文化として、人々の心の中に存在し続けている。

・カバタの社会的価値

集落の各家庭のカバタが水路や川でつながっているからこそ“わきまえ”を持ってカバタを利用し、維持管理している。

「カバタっていうのはね、1本の川の水を上流から下流みんな使っている。だから、上流の人々は川に汚いものを流さない・捨てないというのが当たり前の生活なのね。そうやって上流の人々は下流の人々の気持ちを考えて、川をきれいに使ってきた。下流の人々は上流の人々が川の水をきれいに使って、下まで回してくれている。ありがたいなあという感謝の気持ちを忘れない。」

というFさんの言葉から、集落内はもちろん、上流域（源流域の朽木）から下流域（琵琶湖や淀川、大阪湾）にかけてみんなきれいな水を守り、大切に使う人々の作法が存在するという意識が伺える。これらは、誰かが決めたものではなく、人々が水と関わる中で自然と生み出されてきた価値観や知恵である。

このようにしてカバタは、人々と水の関わりだけでなく、人々の間につながり（信頼関係）、規範などの“社会的価値”をもたらし、感謝や思いやりの心といった“精神的価値”も生み出している。毎日の生活用水としての実用的価値や湧水を使うことで得られる経済的価値以上に、毎日当たり前のようにカバタを利用するという経験の中で生み出された生活の知識（＝生活知・実践知）があるからこそ、カバタ文化は今も人々の生活の中に埋め込まれ、生き続けているといえる。

(b) カバタの価値を守る仕組みづくり

・針江生水の郷委員会の取り組み

今から12年前、NHKの「里山・命巡る水辺」という番組で、針江集落のカバタ文化が取りあげられたことをきっかけに、人々が集落を訪れるようになった。小さな集落に突然外部の人々が入り、勝手に庭先に入って家庭の敷地内にあるカバタを見に来るなど、集落の人々の生活やプライベートが脅かされるようになった。そこで、ある世代を中心に地元住民有志が針江生水の郷委員会を立ち上げた。そして、観光地でないことを前提として、地元住民がガイドとなり訪問者を受け入れるツアーという形で集落内のカバタを案内するようにした。見学科として1人1000円という比較的高額の設定をしているのは、訪問者が過剰に増えることに歯止めをかけるという狙いがあるためである。個人の敷地内にあるカバタは、委員会で了解を得ることができた家庭のカバタのみをツアーコースに設定する。また、集落内の空き家を活用して宿泊施設を運営し、1人1泊3000円でカバタのある暮らしを実際に体験することができる。

このように、委員会が訪問者に対する仕組みづくりを徹底することで、訪問者から対価を得ながらもカバタ文化を売り物にすることなく、集落の生活環境やカバタ文化を大切守ることに貢献することをめざしている。

委員会は日常的なツアーガイドだけでなく、世界湖沼会議に参加して針江のカバタを発信し

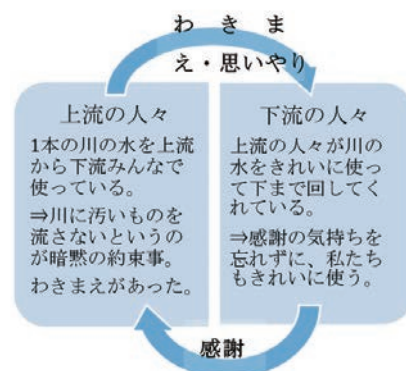


図9 流域を越えた水・人のつながり
(ヒアリング内容を基に筆者作成)

たり、メディアの取材に協力したりと、外部に対して積極的な情報発信も行っている。委員会メンバーのY氏によれば、こうした外部への発信とコミュニケーションを通して針江のカバタ文化に対する評価を受け取ることで、その価値を再認識することができる。これが委員会の活動の原動力の一つとなっていると考えられる。

• 集落による共同資源管理活動

しかし、当初は委員会の活動はカバタという集落の共有資源を使って“金儲け”していると捉えられ、住民から批判があったという。野田（2014）によれば、そうした住民からの批判に対して、委員会は針江区（自治会）と共同で針江大川にコイを放ったり、花のプランターを置くなどカバタ案内以外に集落の環境を向上させる活動に取り組み、次第に理解を得ていったという。

針江集落を流れる針江大川を人々は“使い川”や“里川”と呼び、集落の共有の財産として水を利用し、維持管理してきた。今も3月・5月・7月・11月の年4回、集落総出で川掃除が行われている。これは、集落に暮らす人々みんなで作業をするという社会的な意味に加え、川の水が安全に流れて氾濫を防ぐという防災の意味も含まれている。また、清掃によって藻が刈りとられた川は、居場所がなくなって出てきた魚がたくさんいる。その魚を追いかけて、子どもたちがかいどり（手づかみ）を楽しむ場にもなっている。針江大川は、集落の人々と水のつながりだけでなく人と人を結びつけていたり、地域での防災にもつながったり、子どもたちの遊び場になるなど“社会的価値”を生み出す川でもある。

カバタは各家庭のものであるが、針江大川、ヨシ原、かつての内湖などは集落総出で清掃などを行い、共同資源管理が行われている。針江集落の人々は、カバタから琵琶湖へとつながる“里川”を毎日の生活の中で当たり前のように利用する中で精神的価値や実用的価値などを享受してきた。

Y氏によれば、現在は集落全体が訪問者を受け入れ、「お客さんが来はるから、きれいに使おう！」というような意識が生まれているという。野田（2014）の指摘を踏まえるならば、同時に生水の郷委員会は集落の共有資源を私的に利用しているのではないという共通認識が形成されていると考えられる。

針江集落の人々は、外からの視点をきっかけに今までの生活に埋め込まれていた様々な価値や、それを集落共同体で守っていることを再認識したと言える。

(c)カバタ文化の継承

• 身体の一部としてのカバタ

針江集落の人々にとってカバタは生活の一部であるのと同時に、切っても切れない存在で、まるで身体の一部のようなものである。その例として、Fさん宅では家を新しく建てかえる際に、やむを得ず昔から使い続けてきたカバタをつぶさなくてはいけなくなった。新しい家にも新しい立派なカバタをつくることにしていたものの、先祖代々受け継がれてきたカバタの壺池がレッカーで上げられていくのを見て、寂しいという気持ちを乗り越えて、“痛み”さえも覚えたそうだ。

「洗い物をしたり、とってきた大根を入れて洗って漬物作ったり、お餅を作ったせいろを入れておくとみんな鯉が食べてくれたり…そんなありがたいのを分かっとるのに、急に壺

池をつぶされたら泣けるよ。代わりをこしらえてほしいわって言っても二度と同じ壺池はできないですやん。」

という言葉からは、カバタを失うことが自分自身の過ごしてきた時間や経験を含む心象風景やルーツまでも失うことと同然であるといえる（川田，2013）。このような感覚は、他に置き換えることのできないカバタとの身体的関係性があったからこそ生み出されてきたものである。

このようにカバタは、集落の人々の生活と密接な関係性を持つ最も身近な水辺であり、毎日の生活の中で利用する資源としての価値に限らず、多様な価値を生み出すものであった。それは針江集落の人々にとって、特定の誰かが外部者に対して切り取って“売る”ことができるものではなく、集落全体として守りその価値を享受し続けていくべきもののなのである。

・里川の価値を継承するという課題

「子どもの頃から、カバタって大事だよってというような事を教えられてきた。親の背中を見て育っているから、昔のそういう教えを守り続けてきた。それを守り続けていくうえで、今の自分のありがたさというのを忘れずに、次の代にこうだよって言って伝えていくのは自分らの使命。」

「親のいうことを聞かないといけない時代から、今は自由な時代に変わってきている。それ（カバタ）をいかに守り続けていくかっていうのは、次の世代には少し難しい事であるが、今まで続けてきた大事な台所（カバタ）を後の世代にも守っていったほしい。」

とFさんは語った。この言葉から次世代の若者にカバタを受け継いでもらいたいという想いが見てとれる。しかし、若い世代でカバタを使い続ける人は多くない。生活様式が変化の中で、生活の中に埋め込まれていたカバタ、ひいては里川の価値を享受しづらくなっていると考えられる。

4 考察

4-1 2つの地域から見た琵琶湖周辺地域における里川

多様な価値の顕在化過程を明らかにするために、人と水の関わりが失われつつも面影を残している伊庭集落と、昔から受け継がれ続けている針江集落の2つの地域に着目してきた。

伊庭集落は、内湖の干拓や車社会の到来などにより失ったものは多いが、針江集落のように、水との関わりの中で多様な価値を生み出してきたことが分かった。生活用水として利用する実用的価値にとどまらず、そこには毎日の生活の中で生み出される生活の知恵（＝生活知・実践知）や技が存在し、また水を信仰の対象とする精神的価値、人のつながりは水のつながりと捉える社会的価値を生み出している点は同じであることがわかった。地域の人々と密接な関係性を持つ身近な川（水）をみんなのものとして管理・利用する、“近い水”としての里川的な関わりがあったことを確認できた。そして、伊庭集落と針江集落で多様な価値が顕在化する過程の発展段階が異なっているということも分かった。

4-2 外部との関係がもたらす可能性と課題

針江集落の人々は、外からの視点によって自分たちの当たり前の生活を見直し、カバタ文化が集落の宝であることに気づいた。そして、私たちのような生まれた時から蛇口の水しか知らない人々との対話（自分たちの暮らす地域を言葉で伝えていくこと）の中で、カバタを通した

水との関わりの経験を継承することを試みている。この経験の継承を通して、針江の人々は集落の魅力を再発見し、外部の人間は、自然は多様な価値を持っていること、自然と関わり続ける中で生み出されてきた生活の知恵や技を知ることができる。そして何より、自然の価値を“資源”としかとらえることができない生き方をしていることに気づくのだ。このような関係性は、双方にとって意味のあることであり、地域づくりを進めていくうえでも重要な視点なのである。これが本稿で言う価値の顕在化過程である。

針江集落の人々が共同で守ってきた里川を、人と自然の関係性の総体として今後継承することが課題である。

伊庭集落は、針江集落のカバタのように、今の時代もカワトや田舟を使った生活をしているわけではない。しかしながら、日本遺産に認定されたこともあり、今後水辺景観を将来世代に守り伝えようとする動きが出てくると考えられる。

現在は、まだ地域住民の間で自然との関わりの中で見出された多様な価値を明確に表現するガイド育成などが十分でない現状であるものの、一方では日本遺産認定によって針江集落が一貫して避けてきた観光地化が進んでしまう可能性もある。伊庭集落の人々が自ら生活に埋め込まれた里川の価値を認識する過程なしに、切り取られた水辺景観が資源化され“売り物”にされることは果たして里川の多様な価値を継承することにつながるであろうか。

伊庭集落にとって今後の課題は、集落全体の財産である水辺の暮らしと景観を管理する体制を改めて整えていくことであろう。そのためには、集落の人々が地域の水辺景観の多面的な価値に気づき、自ら守り継承する内発的な動機を持てるかどうかが重要である。上述したように、価値の顕在化過程における外部者の評価がその重要なきっかけになる可能性もある。集落の人々との対話の中から、一人ひとりの自然との関わりの“経験”にふれることができれば、集落に点在する“伊庭集落で暮らす人々の文化・伝統を語るストーリー”を水辺景観と共に未来に残すことができるのではないだろうか。

5 おわりに

琵琶湖周辺の地域は、多様な自然の価値や時代の変化の中で私たちが失ってしまったものに気づかせ、問いかけてくれる。そして、今を生きる私たちが忘れかけている大切なものを教えてくれる地域だ。

私たちは毎日の生活の中で、蛇口をひねれば水が出るという生活を当たり前のようになっている。水を資源として利用することが目的となっている“遠い水”としての関わり方をしてきたのだ。

今回の研究での、自然と共に生きてきた地域の人々とのふれあいを通じて、私たちは“人と人のつながり”や“わきまえ・思いやり”などを大切にして、水と多様な関わりを持つ生き方を知った。私たちは、便利であることが豊かさであると捉えてしまいがちな現在の社会の中で、“本当の豊かさ”を忘れてしまっていたことに気づかされた。そして本当の豊かさというのは、“人と自然との関わりの中で見出される多様な価値を受け取ることのできる生き方”なのでは

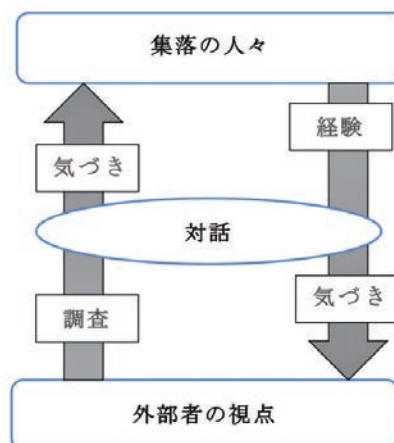


図10 価値の顕在化過程（筆者作成）

ないか。

普通に生活していたら気づくことができないような目には見えない豊かさを感じることができ。それが人間の想像力や創造性の源泉となる。これこそ人と自然が関わることの意味であると私たちは考える。

参考文献

- 荒川 康・五十川飛暁『環境社会学における生活環境主義の位置—「経験論」を手がかりとして』, 2008
 嘉田由紀子『生活環境主義でいこう!』ジュニア新書, 2008
 嘉田由紀子『水をめぐる人と自然日本と世界の現場から』有斐閣, 2003
 川田美紀「水環境の社会学—資源管理から場所とのかかわりへ—」『環境社会学研究』第19号, 174-183, 2013
 小坂育子『シリーズ近江文庫台所を川は流れる—地下水脈の上に立つ針江集落—』新評論, 2010
 鳥越皓之・帯谷博明『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズよく分かる環境社会学』ミネルヴァ書房, 2009
 鳥越皓之・嘉田由紀子・陣内秀信・沖 大幹『里川の可能性: 利水・治水・守水を共有する』新曜社, 2006
 鳥越皓之・桜井 厚・松田素二・嘉田由紀子・大槻恵美・大西行雄『環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から—』御茶の水書房, 1989
 鳥越皓之『環境社会学生活者の立場から考える』東京大学出版会, 2004
 植田 勲・嘉田由紀子『水と暮らしの環境文化: 京都から世界へつなぐ』昭和堂, 2003
 野田岳仁「コミュニティビジネスにおける非経済活動の意味: 滋賀県高島市針江集落における水資源を利用した観光実践から」『環境社会学研究』第20号, 117-132, 2014
 林 希一郎『生物多様性・生態系と経済の基礎知識: わかりやすい生物多様性に関わる経済・ビジネスの新しい動き』中央法規出版, 2010
 針江生水の郷委員会『針江』パンフレット
 東近江市史能登川の歴史編集委員会『東近江市史能登川の歴史』滋賀県東近江市, 2012
 東近江市史能登川の歴史編集委員会『東近江市史能登川の歴史ダイジェスト版』滋賀県東近江市, 2015
 滋賀県内湖再生全体ビジョン
<http://www.pref.shiga.lg.jp/d/biwako/naiko/files/130318honpen-naiko.pdf> (最終閲覧日: 2016年10月28日)
 高島市の人口・世帯数 (平成28年)
<http://www.city.takashima.shiga.jp/www/contents/1249543233441/index.html> (最終閲覧日: 2016年10月20日)
 地図マピオン
<http://www.mapion.co.jp/map/admi25.html> (最終閲覧日: 2016年11月2日)
 日本遺産「琵琶湖とその水辺景観—祈りと暮らしの水遺産」
<http://ja.biwako-visitors.jp/japan-heritage/> (最終閲覧日: 2016年11月4日)
 日本歴史巡り (高度成長期)
<http://www.jphistoryrd.com/sho/kodo.html> (最終閲覧日: 2016年11月3日)
 針江のんきいふあーむHP
<http://nonkifarm.com/> (最終閲覧日: 2016年11月2日)
 文化庁HP (日本遺産)
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/ (最終閲覧日: 2016年11月4日)

- 1 近い水とは、井戸や川水や湧水といった、人々から近い水源からの水のことで、地域や人々の工夫によって得られるもの（嘉田，2003）。
- 2 遠い水とは、遠い水源から長い管を通じて運ばれてくる水で、いわゆる近代化によって得られる水道水（嘉田，2003）。
- 3 琵琶湖総合開発とは、琵琶湖の自然環境の保全と水質の回復を図りつつ、水資源の利用と関係住民の福祉を増進することで近畿圏の健全な発展に寄与することを目的として、1972（昭和47）年度から25年間かけて実施された。事業は自然環境を守るための保全対策、琵琶湖周辺の洪水被害を解消するための治水対策および水をより有効に利用できるようにするための利水対策の3つの柱で構成された（滋賀県内湖再生全体ビジョンより）。
- 4 内湖とは、琵琶湖の一部であったが土砂などによって隔てられた水域のこと。
- 5 おかず捕りとは、田んぼと湖、川を行き来しながら農業と結びついた魚捕をしている。その中で、畑仕事の帰りに仕掛けに入った魚を捕ってカバタに入れ、食卓のオカズに1品添えるという待ちの漁法のこと。
- 6 干拓とは、水面や低湿地などを堤防で閉め切り、内湖の水を排水して新たに農地を作ること。
- 7 近江水の宝とは、滋賀県の教育委員会の文化財保護課が、滋賀県内から昔の風景が残っている由緒あるところを100箇所選定するもの。
- 8 景観法とは『我が国の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的とする。』（景観法：第一章を引用）
- 9 日本遺産とは、『地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを日本遺産として文化庁が認定するもの。また、日本遺産は登録・指定される文化財（文化遺産）の価値付けを行い、保護を担保することを目的とする世界遺産とは異なり、地域に点在する遺産をその地域の魅力として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている。』（文化庁HPを引用）
- 10 縮織とは、撚りの強い横糸を使い、織り上げた後に温湯でもんで縮ませ、布全体にしぼを表した織物のこと。
- 11 撚糸とは、織物や糸を1本または2本以上そろえて撚りをかけた糸のこと。
- 12 緑肥とは、生きている状態にある緑色の植物を田畑の土中にすき込んで作った肥料のこと。